

「教育の未来構想」を先導する、
高度な教育者、研究者を目指せ！



東京学芸大学大学院
教育学研究科（修士課程）
教育支援協働実践開発専攻

教育協働研究プログラム ガイド



2023



教育協働研究プログラムは、学校が必要とする学校外の教育資源を、自身の社会教育・生涯学習・芸術・スポーツ・行政・法務等の専門的知識を通じて、学校と連携・協働しながら活用し、教育の社会的ネットワークを構築しつつ教育改革を先導する人材の養成を自的とします。

教育協働研究プログラムガイド

CONTENTS

1. めざす力と研究デザイン
2. 教員の専門領域
3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴
4. 教員の紹介
5. 教員からのメッセージ

東京学芸大学 大学院 修士課程の組織・編成

修士課程の組織・編成は、下図に示すように、次世代日本型教育システム研究開発専攻、教育支援協働実践開発専攻の2専攻があります。その教育支援協働実践開発専攻の中に、教育AI研究プログラム、臨床心理学プログラム、そして教育協働研究プログラムがあります。

修士課程 [2専攻]

次世代日本型
教育システム
研究開発専攻

教育支援協働実践開発専攻

- 教育AI研究プログラム
- 臨床心理学プログラム
- 教育協働研究プログラム

2つの専攻どちらでも留学生を受け入れます

ようこそ皆さん、教育協働研究プログラムへ

はじめに

東京学芸大学の教育学研究科修士課程は、これまでの本学修士課程の内容を発展させ、「教育の未来構想」を先導するためのグローバル、教育AI（人工知能）、臨床心理、教育協働などの、これからの社会で求められる先端的な「プラス α （アルファ）＝テーマ」に焦点を合わせ、その内容を教育の側から改めて捉え直すとともに、それら「プラス α ＝テーマ」の専門性をも兼ね備えた、総合的で新たな能力を身につけた教育者・研究者を育てることを目指しています。

この「プラス α ＝テーマ」に応じた4つの内容の一つ、それが「教育協働研究プログラム」です。ここでは、その概略を説明していきましょう。

1. めざす力と研究デザイン

教育協働研究プログラムでは多様な専門分野にわたる教員の下でそれぞれの専門性を高めつつ、領域横断的なカリキュラムを通して学校教育に迫る3つの力を自分のものとすることを目指しています。



① 教育ネットワーク力

学校教育の課題を把握し、その適切な解決策を構想し、それを実現するために学校外とのネットワークを組織できる力



② 教育改革推進力

学校教育支援のための専門的知識を、学校教育の場で、実践的に展開し、教育改革を推進できる力



③ 教育支援モデル開発力

これまでの学校教育支援のあり方を批判的に研究し、新しいモデルを開発し、国内外に応用・普及できる力

この3つの力のうち一つを深堀するフォーカス・スタイルで学修・研究を進めるか、二つ三つと重ね合わせたハイブリッド・スタイルで学修・研究を進めるか、指導教員が皆さんに伴走しながら学修・研究デザインを描いていきます。

2. 教員の専門領域

教育協働研究プログラムを担当する教員の専門領域は次の9つにわたっています。指導教員が決まると、その専門領域は指導を受ける学生が基盤とする学修・研究の領域となります。各教員がどの領域で、どのような研究を進めているかについては、「教員の紹介」頁や教員の関わるWebサイトを参照してください。

生涯学習

すべての人の学び合いを支援する実践を攻究

君塚／前田／柴田／倉持
／大森

文化遺産教育

文化財に関する専門的知識を深め、学校や社会に貢献する人材を育成

日高／新免／李

ソーシャルワーク

人々の生活課題への取り組みとWell-Beingの実現を支える専門性を追求する

加瀬／内田／梅山／露木
／角田

生涯スポーツ

スポーツへの多様な関わり「する、見る、支える、知る」を科学して、スポーツの持つ文化的価値を追求する

久保田／森山

多文化共生教育

言語と文化の網の目から、グローバル社会における共生のあり方を考える

范／小澤

表現教育

演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術表現活動を取り入れた芸術教育、コミュニケーション教育、ワークショップを探究する

花家

アート

演劇・映像の力を考える

近藤

デザイン

「あそびは最高の学び」をモットーに、共育の実践と研究で教育をデザインする

鉄矢

教育行政

すべての人の育ちと学びを支える社会の仕組みについて考える

佐々木／前原／岩田／
上杉／末松

3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴

その1

教育協働研究プログラムのカリキュラム構成は次のようになっています。
(教育支援協働実践専攻を構成する他のプログラムと同様です。)

① 専攻基盤科目

「教育支援協働学概論」「教育コラボレーションと現代社会」
「教員の社会的役割とキャリア形成」の3科目
(専攻共通・必修6単位)

② 専攻基礎科目

「教育ネットワーク論」の1科目(プログラム共通・必修2単位)

③ 専攻展開科目 (開設科目のなかから選択10単位)

④ 専攻発展科目

「フィールド研究」(選択必修8単位) 「特別研究」(必修4単位)

この中で、教育協働研究プログラムの特徴となっているのが③と④における**領域横断的な科目設定**です。

(1) 教育協働研究プログラムにおける専攻展開科目の特徴

教育協働研究プログラムの専攻展開科目は次の3つの領域から構成されています。そして各領域から必ず1科目・2単位以上を履修し、合計で10単位以上を取得することになっています。

その目的はまさに深い専門性と幅広い視野を持つ中で、3つの力(教育ネットワーク力・教育改革推進力・教育支援モデル開発力)を追求してほしいからにほかなりません。

① 教育環境領域 (22科目開設)

豊かな学びを促進する教育の環境整備に関する高度な知識や技能の領域

② 地域創生領域 (23科目開設)

ダイバーシティに対応する地域創生に関する高度な知識や技能の領域

③ 教育法規・行財政領域 (10科目開設)

学校を中心とする制度的教育基盤に関する高度な知識や技能の領域

3. 協働性を高めるカリキュラムの特徴

その2

(2) 専攻発展科目「フィールド研究」の特徴

修士課程全体の特徴の一つに〈サービス・ラーニングの視点を導入〉があります。これはフィールド研究を中心として、社会実践活動と学修活動を両立させる方法であり、より主体的で実践的な学びを展開しようとするものです。

教育協働研究プログラムではこのフィールド研究にも領域横断的科目設定の視点を導入しています。具体的には1年次秋に履修する「フィールド研究N」は、1か所のフィールドに限定するのではなく、3つのフィールドに分割して実施することになっています。そして2年次春に履修する「フィールド研究O」では、その学びをベースにフィールドを1つに絞って展開していきます。その理由は専攻展開科目と同様に「深い専門性と幅広い視野」をもって欲しいからです。

なお、3つのフィールドの分割方法は① 教育環境領域、② 地域創生領域、③ 教育法規・行財政領域のいずれかの中で3つのフィールドで行う場合と、二つまたは三つの領域に対応して複数のフィールドで行う場合の2種類があります。どちらの方法にするかは皆さんの学修・研究スタイルに応じて決めていくことになります。



修士課程では〈社会との連携・協働による研究・教育〉も特徴の一つに掲げています。フィールド研究は企業、行政、地域、学校などと強く連携・協働する中で、具体的な課題解決に結びつくことを意識した学びを展開するものでもあります。

教育協働研究プログラムの概要はご理解頂けたでしょうか。次ページからの教員の自己紹介とあわせ、その意図、特徴、そして魅力が伝わることを願ってやみません。

4. 教員の紹介 1 / 3

君塚仁彦 教授
KIMIZUKA Yoshihiko
博物館学(博物館と教育
支援・地域博物館論)



現在、取り組んでいる研究テーマは、①戦争・ハンセン病問題・災害の記憶と博物館活動、学校教育支援、②美術館と学校・地域における鑑賞教育支援、③附属学校アーカイブズ論の3つです。①は、学校教育・生涯学習の連携を念頭に、戦争やハンセン病問題、3・11の記憶・記録を援用した博物館活動・教材開発・地域連携など、新たな道徳教育への展開も視野に入れた実践的な教育支援研究。②は、世田谷美術館をフィールドに、教育支援者である学芸員の職能論を絡めた学校・地域・大学の連携する鑑賞教育支援に関する実践研究。③は、本学大学史資料室・室員の立場で、幼稚園を含む本学附属学校の基礎的なアーカイブズ研究ということになります。



前田稔 教授
MAEDA Minoru
学校図書館学/学校司書論
/図書館の自由

学校教育における新しい学習指導要領で中核的役割を果たす「主体的・対話的で深い学び」の記述では、読書活動や情報活用能力の育成、学校図書館の環境整備が占める割合が大きくなっている。学校図書館は、物語が好きな子供のみが利用する場から、すべての子供の言語力・読書習慣を確立する拠点として変化してきた。また、物語だけでなく、ノンフィクションを教科・科目の授業と連動させることが大きな課題となっている。暗く静かな空間から、明るく賑やかな居心地のよい場所へと展開しつつある。研究においては、学校教育において、学校図書館が提供するサービスの役割を明らかにすることを目指し、なかでも、個の自由と関わる意義について考えているところである。

柴田彩千子 准教授
SHIBATA Sachiko
社会教育学/生涯学習論



地域に住まう人々が、地域づくりの当事者意識を持って実践する多様な取組みの中に内在する「学び」に、関心を持っています。研究テーマは、地域社会のなかに「地域の教育力をいかにして構築するか」ということです。たとえば、家庭・学校・地域(社会教育、NPO、企業等)の協働の在り方、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動の動向調査、子育て中の母親や父親の学びの実態や支援の方策について取り上げることによって、「地域の教育力」を考察しています。最近では、東日本大震災後の子ども支援を行うNPOの事例調査、子どものキャリア教育を支援する成人の学びについての調査、子育て中の母親に関する学びのニーズ調査等を行いました。



倉持伸江 准教授
KURAMOCHI Nobue
生涯学習論/社会教育学
/成人教育学

成人学習論や支援論、社会教育職員論、省察の実践論、組織学習論などを中心とした理論研究と、社会教育実践、職員実践、養成・研修実践などの実践研究を往還している。一人ひとりの生き方が多様化する中、一方で地域課題・社会課題も複雑化する中、生涯学習への期待はますます高まっている。それとともに、主体的な学び合いを引き出し(ファシリテート)、つなぐ(コーディネート)学習支援者の役割も重要になっている。最近では、社会教育主事養成制度が改訂されたことと関わって、実践的専門性を形成する養成・研修カリキュラム、実習を軸とした学習支援者の養成、生涯を通じた学習支援者の力量形成、連携・協働による生涯学習支援などについて主に研究している。



大森直樹 教授
OHMORI Naoki
人権教育/教育実践
/教育史

いま2つのことを研究テーマにしています。1つ目は、3・11後の教育についての研究です。具体的には、「被災校」や「避難した子どもを受け入れた学校」の教育実践記録の収集と整理を行い、震災を忘れない取り組みの諸課題を明らかにすることです。2つ目は、戦後日本教育史の研究です。とくに1958年に行われた教育課程制度の再編の全体像について。全体像に接近するために、この再編を、戦後教育改革下においても行政裁量と中央集権の理念を持続していた文部官僚の役割、講和条約発効後に胎動した保守政党の教育政策、戦争の時代にたいする悔恨を熱源とした教育運動、という3つの側面から把握することを試みています。

日高慎 教授
HIDAKA Shin
考古学/文化財科学



現在取り組んでいるのは、フィールドワークとして栃木県壬生町での国指定史跡の古墳調査がある。壬生町と共同で、学生とともに夏休みに発掘調査をおこなっている。私個人としては、日本の古代について考古学を中心に研究しており、交流や流通を物質資料から解明したいと思っている。手工業生産品は当然ながら生産地が存在するが、さらに供給先の遺跡を見ていくことで、物流のルートを解明できると考えている。また、古代の儀礼についても研究を進めており、当時の人びとの考え方や思想を物質資料から考えたいと思っている。キーワードとしては、船、埴輪の生産と供給、道路、渡来系文物、首長墓、首長居館、王権継承の場などである。



新免歳靖 講師
SHINMEN Toshiyasu
文化財科学/考古科学
/窯業技術/地域文化
遺産の保存と活用

文化財科学とは聞きなれない学問だと思えますが、文化財を対象に自然科学的な研究手法を用い、その製作や利用に関する履歴を明らかにしたり、保存に役立てる学問です。私は多様な文化財の中でも主に窯業、特に古い時代の陶磁器やガラス製品の製作技術を解明する研究を行っております。また、近年は、地域にある文化遺産を保存するにあたって、行政の力に頼るだけでなく、地域住民の取り組みによって保存活用する方法に関心を持っています。



李ガン 講師
LEE Kang
保存科学/劣化計測学
/修復材料と技術
/製紙科学

文化財を保存し、守っていくことは現代を生きる我々の責務でもありますが、森羅万象のどれもいずれは消滅するのと同じように、文化財も物質で構成されている以上、時間とともに劣化していきます。そこで、多様な文化財の素材を対象になぜ劣化が起きるのか、その原因を科学的に探究し、保存修復に使用する材料や技術を科学的に評価し、開発しております。特に紙文化財とその修復を対象にした研究に興味があり、文化財のモデル試料を作って劣化を再現させ、制御された実験環境の中で根気よくテストを繰り返します。その過程の中で文化財を「物質」として見る目を養い、革新的な保存修復方法を提案していきます。



加瀬進 教授
KASE Susumu
障害者福祉/地域福祉
/特別ニーズ教育

2001年に母校である本学へ赴任以来、福祉Welfareと教育Educationをつなぐ多職種連携研究(自称WEコラボ研究)を進めてきました。近年はここに「教育支援(子どもを支援する/教育者を支援する)/教育支援人材養成」、「多様な学び(オルタナティブ教育)と評価問題」及び「子どもの貧困とチームアプローチ」を重ね、「子どもの最善の利益」とは何か、という問題に改めて分け入りつつあります。特に現在、本学に設置された「子どもの学び困難支援センター」のセンター長を務めており、貧困・虐待・不登校等により学びが制約された子どもたちの「学びを拓く」研究にウェイトがおかれています。詳しくは、なかなか更新されない研究室ブログまで→<http://www.we-collaboration.com/>(^_^)

4. 教員の紹介 2 / 3



内田賢 教授
UCHIDA Masaru
経営学／人的資源管理論

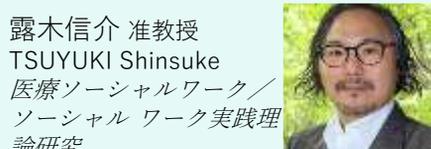
企業行動を分析する経営学のなかで、働く人について研究する人的資源管理論を専攻している。以前は海外進出した日本企業の現地での人事労務管理、最近では少子高齢化時代のわが国の高齢者雇用が研究テーマとなっている。わが国では現在、企業に対して60歳以上の定年制と希望者全員を対象に65歳までの継続雇用を求めている。加えて今年施行された改正高年齢者雇用安定法では70歳までの就業機会確保が努力義務として新たに求められるようになった。活き活き働く高齢者の職場（オフィス、工場、スーパー、社会福祉施設などさまざま）を訪ねて全国を回っている。



梅山佐和 講師
UMEYAMA Sawa
子ども家庭福祉／司法福祉
／スクールソーシャルワーカー

私は、とくに児童虐待や非行にかかわる子ども家庭への支援について、研究と実践からアプローチをしてきました。課題の解決緩和のためには、子ども家庭が「何に困っているのか」について、包括的にアセスメントを行い、それに基づいた手立てを考え、ミクロ・メゾ・マクロすべてに対して計画的に支援を展開することが求められます。また、子どもを中心とした多機関の連携協働が必要となります。

私は、実践経験を踏まえて、ソーシャルワークの視点から、施設や学校等の支援現場において、これらの包括的アセスメントおよびプランニング、チームアプローチを可能とするシステムの構築・定着について研究をすすめています。



露木信介 准教授
TSUYUKI Shinsuke
医療ソーシャルワーク／
ソーシャルワーク実践理論研究

「現代におけるソーシャルワークとは何か」というテーマを中心に、ソーシャルワーク実践における理論研究を行っています。また専門の領域は、保健医療分野におけるソーシャルワーク研究です。

近年の研究は、働く世代のがん患者へのソーシャルワークに関する研究や、「チーム医療」や「地域医療」などの多職種連携・協働（IPW）に関する研究も行っています。



角田慰子 特任講師
TSUNODA Yasuko
障害者福祉／社会福祉発
達史／コミュニティソー
シャルワーク

知的障害がある人たちの地域生活支援、とりわけグループホーム構想の成立史およびその担い手に関する研究に取り組んでいます。グループホームをはじめ、日本における知的障害者の地域生活支援施策は、脱施設化政策を推進してきた欧米の福祉先進諸国とは異なり、入所施設拡充路線が堅持される状況下において、きわめて脆弱な財政基盤のもとに成立し、展開されてきました。地域生活支援を志向する政策理念が標榜される一方で、その進展は長らく遅々たるものでした。こうした政策理念と実態のはなはだしい齟齬は、どのように生じたのでしょうか。その起源に立ち返り、検証することで、今日的課題の構造と今後の展望が見えてくることがあります。



久保田浩史 准教授
KUBOTA Hiroshi
コーチング論／
体育・スポーツ測定評価
／運動学／柔道指導論

スポーツパフォーマンス、心身の健康について、測定評価学を通して、科学的に追求します。経験、感覚に捕われ、真理が見えなくなってしまうように科学的分析を用いること、また、その逆、現場の感覚を大切にしながら、その感覚をいかに科学的に証明していくか、を考えています。また、私が専門とする運動種目が柔道なので、柔道の競技パフォーマンスの向上に関する研究や、柔道授業プログラムや、柔道を活かした運動プログラムを開発しています。

人々が心身の健康を保つために、スポーツ、運動は必要です。多くの人に生涯に渡ってスポーツ、運動に親しんでもらうように、様々なチャレンジをしていきます。スポーツ種目間や、スポーツと他分野のコラボレーションにも取り組んでいきたいと思っています。



森山進一郎 准教授
MORIYAMA Shin-Ichiro
コーチング論／運動学／
水泳指導論

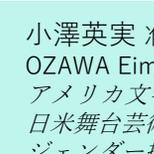
私の主な研究テーマは、運動技能の獲得(初級、中級者)と競技力の向上(選手)です。最近では、競技者向けのトレーニングを、学校体育をはじめとする競技者以外の練習への活用法を検討しています。研究方法は、映像、センサーを含む色々な機材を用いて、力学指標や生理学的指標などの定量データを扱う実験的な内容が中心ですが、学生のニーズにあわせて、インタビューや質問紙調査のような定性データを扱うこともあります。

人間が好き、運動が好き、そんな方々と力をあわせて、「運動・スポーツ・体育を通じた幸せな人生の獲得」を目指した研究に取り組みたいと考えています。



范文玲 准教授
FAN Wenling
中国近代文学／中国語教育

専門は中国近代文学で、郁達夫という作家の小説を中心とした研究を行っています。近年では日本と中国ともに中学3年生の国語の授業で扱う魯迅の「故郷」という作品の教え方の日中比較に関する研究調査を行っています。また、外国にルーツを持つ子どもたちに対する日本語教育や母語教育にも関心があり、昨年度は大阪の中学校や国際交流協会での母語教育に関する取り組みについて調査をしてきました。大学院の授業では、それらの子どもたちに対する日本語教育・母語教育の現状と課題を整理し、私自身の日本語獲得・母語保持の経験も踏まえながら、どのような支援ができるのかについて考えます。



小澤英実 准教授
OZAWA Eimi
アメリカ文学・文化／
日米舞台芸術／
ジェンダー批評

アメリカの視聴覚文化（文学、映画、演劇、TVなど）を、テキストと身体の関係から読み解くことを通して、社会や歴史の様態を研究しています。とくにフェミニズム、ジェンダー、クィアスタディーズの視点から、さまざまな作品の政治的表象を読み解くことにも力を入れています。これまでゴシック小説の研究から拡がり、ホラー映画における幽霊・ゾンビの表象を研究してきましたが、近年では日本の現代文学や小劇場演劇を中心としたパフォーマンス・アーツやサブカルチャーなども対象に含め、領域横断的に（雑食的・つまみ食いの）、文化のダイナミクスを捉えることを目指しています。



花家彩子 准教授
HANAKE Ayako
演劇教育／演劇理論

演劇と教育の関係について研究しています。研究作業の入り口は如月小春という劇作家・演出家の子どもや地域の人々との演劇活動について書いた実践記録についての研究でした。この作業から、実践記録に書き込まれた書き手の演劇観と教育観の食い違いや、その食い違いに対する書き手自身の葛藤を読み取ることに関心を持ち、今はこのような演劇の実践について書かれた記録の整理を進めているところです。その傍で、演劇という形式の特異性を考えなければならないという事情から、デジタルゲームや絵本についても勉強中です。

4. 教員の紹介 3 / 3



近藤弘幸 教授
KONDO Hiroyuki
シェイクスピア研究
／翻訳・翻案理論

研究対象はシェイクスピアです。彼の作品そのものの研究だけでなく、それがどのように日本文化に受容されてきたかに関心を持っています。最近、とりわけ、明治時代、シェイクスピアの作品に初めて接した人々が、どのように彼の作品を日本の文化の中に受け入れていったのかを研究しています。明治時代のシェイクスピア受容という、真っ先に思い浮かぶのは坪内逍遙ですが、そうした「王道」の受容とは異なる、これまではほとんど研究されてこなかったチャンネル（新聞連載小説といった大衆的なチャンネル）での受容を掘り起こしていきたいと考えています。現代の日本文化（ハイカルチャーもポップカルチャーも）によるシェイクスピア受容にも関心を持っています。



鉄矢悦朗 教授
TETSUYA Etsuroh
デザイン（立体）／
デザイン教育

「あそびは最高の学び」という研究キーワードとともに、実践的なデザイン研究を軸としています。当たり前を疑うアンテナを研ぎ澄ませ、コミュニケーション・生活・遊び、教育などを、モノづくり、コトづくり、バズりに取り組みながら、デザイン・デザイン教育の研究を行っています。実践では公開制作やワークショップなどを通じた協働「共育」の機会を大切にしています。都内をはじめ、猪苗代、延岡、豊頃、掛川など様々な地域の人々と地域振興や産業の活性化、そして教育の活性化を目指しながら「共育によるまちづくり」活動をしています。具体的な活動は 本学の美術科 環境・プロダクトデザイン研究室のHPで。



佐々木幸寿 教授
SASAKI Kouju
教育行政学／学校法
／学校法務

教育基本法をはじめとした教育関係法、学校関係法の体系、さらには近年、国内において重要な根拠法となりつつある子どもの権利条約の基に形成されつつある法制の研究を行っている。また、スクールロイヤー等の法曹専門家が学校教育に関わる動きが見られることについて学校法務という視点から研究を行っている。教育法制、学校法制は、教育行政システム（政治システムを含む）の変動が大きな影響を与えていることから、法制と関係にも注目した研究を行っている。

前原健二 教授
MAEHARA Kenji
教育行政学／教育経営学



基本的に日本の教育に関する研究とドイツの教育に関する研究を並行して進めています。日本については、いったん企業等に勤務した後に教職に就いた「中途入職教員」についてのエスノグラフィックな研究に取り組んでいます。中途入職教員に期待する言説はたくさんありますが、実際の活躍ぶりはありません。ドイツについては中等学校制度改革と教員研修改革の研究を進めており、年に2度ほど調査出張に行き、教育行政の担当者、教育研究者、教員研修講師の方などにインタビューをしたりしています。外国の事情を知ることが、自分の考え方を相対化して視野を広げるためにとても有効な方法だと考えています。



岩田康之 教授
IWATA Yasuyuki
教育経営学／教員養成論

教師になる者の学び（主に入職前の教師教育・教員養成）について、そのシステムやカリキュラムの研究をしています。日本の戦後改革期を中心とした歴史研究的なアプローチに加え、こしばらくは主に東アジア諸地域を視野に入れた比較研究的なアプローチも手がけています。近代国家の成立とともに教育制度が整備され、その担い手である教師を組織的に確保する必要性が生じたわけですが、その教師のありようは、それぞれの地域における歴史的・文化的背景によって枠取られており、それゆえ教師になる者に期待される資質や、その準備教育のありようも多様性を帯び、様々な課題を持っています。そのメカニズムの解明を中心的なテーマとしています。

上杉嘉見 准教授
UESUGI Yoshimi
カリキュラム論／
メディア教育学



私はおもに、現代の商業的な生活環境を扱うメディア・リテラシー教育について研究しています。最近、前世紀に北米地域で見られた、消費者教育領域での広告を取り上げた教材の分析にも取り組んでいます。このほか、メディア・リテラシー教育研究から派生するかたちで、学校カリキュラムの商業化という現象にも注目しています。この研究の背景には、営利企業が自社の商品・サービスと関連させて開発した教材や授業は「広告」であり、教育の公共性を衰退させるものではないか、という問題意識があります。また、学校が外の世界と連携しようとするとき、ゲートキーパーとしての教員が備えておくべきメディア・リテラシーは何か、ということも追究しています。



末松裕基 准教授
SUEMATSU Hiroki
教育経営学／学校経営学

現代にふさわしい教育や学校のあり方について考えています。“今、私たちはどのような社会に生きているのか？”このような問いを大切にしながら、現代社会の特徴を分析し、その前提を問いながら、具体的な学校の経営戦略・方策を考え、また、そのさいに必要な教師の学びのあり方、経営者のリーダーシップ開発のあり方を研究しています。

日本にくわえて、イギリスを中心に国際的な学校改革の特徴、教育経営環境の変容にも着目し、そこに見られる教育改革の原理や学校制度、統治スタイルにも関心を持って考察を進めています。

「せんせいの七」には教員インタビューがあります



5. 教員からのメッセージ

目的やレベルに関わらず、スポーツに取り組む人々の役に立つ研究に興味のある方、学びの結果を自分自身の技能向上につなげたい方、人とふれあうことが好きで、スポーツを科学することに興味のある方を歓迎します。(森山進一郎)

近年法律で明記されるに至った学校司書の専門性を高めることも目指しています。これから学校司書を目指す方だけでなく、現職の方も大歓迎です。(前田稔)

既存を疑い、受動的ではなく、能動的に、自分の未来を自分の手で創造してほしいと思います。(露木信介)

希望する研究領域の最前線を“ナビゲーションできる教員／ネットワークを持っている教員”のもとで学べるかがポイントです。大学院説明会等を通して確実な情報収集をしてください。(加瀬進)

教育をめぐる課題は、誰でも論じられるように見られがちですが、それぞれの背景は錯綜しており、解明することは実は困難です。割り切れない問題がたくさんあります。「わからないから面白い」と思って、一緒に考えてくれる人を歓迎します。(岩田康之)

「逃さない、手放さない」。人生には学びを深めるための様々なチャンスと出会いがあります。チャンスを逃さず、出会いを手放さないように大切にしたいと私は思っています。また、生きることを豊かに楽しみ、自らWell-Beingを追求することが、より良い支援に繋がると考えています。(梅山佐和)

研究室はただテクニックを習得する場ではなく、常に「なぜ」を問いかけ、ディスカッションを通して自ら答えを探る力を養う必要があります。その中で新しい発見ができるようにバックアップしていきます。(李ガン)

現場がある研究対象であれば、面倒くさがらず実際に足を運んでほしい。必ず発見がある。(内田賢)

夏休みにおこなっている発掘調査では、地域の人びとや子どもたちと交流をもちながら、自らの考えをどのように伝えていくかということ学んでいきます。やる気のある学生を大いに募集しています。(日高慎)

教育法、学校法、教育行政に関心のある方、また、将来、教育行政等の行政実務の仕事に就きたいと考えている方を歓迎いたします。(佐々木幸寿)

知的探究・知的好奇心に貪欲な方、メリハリのある方、自らの研究課題、方法に自らの力で粘り強く向き合う方をお待ちしています。これからの社会や教育のあり方を複雑に、粘り強く一緒に考えていきましょう。(末松裕基)

表現活動なんて、何がどのように価値があるのか、本当のところはよくわからないものです。その「よくわからなさ」に、果敢にも、取り組もうとする人を歓迎します。自分にとって価値ある修士課程の時間を過ごすために貪欲になってください。(花家彩子)

修士課程では自分の専門性を伸ばして欲しいと思います。それと同時に既存の学問領域にとらわれない視野や思考を手に入れて欲しいです。(新免歳靖)

出会った素材、与えられた素材をいかに活かしてより良いデザインを生み出していくか？最高のパフォーマンスを出すためには具体的に何をどうしたらいいのか？はじめてのコトは、試行錯誤しながらやるしかない。(鉄矢悦朗)

教育の未来構想はじまる

学芸大の新たな修士課程



奨学金について

<https://www.u-gakugei.ac.jp/scholarship/>

長期履修制度について

学生が「職業を有している」等の事情により、教育学研究科の標準修業年限（2年）を超えて一定の期間（3年又は4年）にわたり計画的に教育課程を履修し修了することを希望する旨を申し出たときは、その計画的な履修を認めることができる制度（「長期履修学生」制度）があります。

この制度により長期履修学生が修了するまで、1年間に納める授業料の額は、標準修業年限（2年分）の授業料を、計画的に履修することを認められた一定の期間の年数（3年又は4年）で除した額となります。

なお、この制度は、在学途中で長期履修を申請することもできますが、その場合の授業料は標準修業年限分の授業料より高くなりますのでご注意ください。

※臨床心理学プログラムにおける公認心理師・臨床心理士の資格取得希望者は、本制度は利用できません。



<https://www.facebook.com/edukyodo>

フェイスブックでも情報を発信しています。

